

● 制作

流転の結い目

～武蔵野の雑木林が織りなす多磨の循環と弔いの風景～

佐々木 達有

園芸学部 緑地環境学科 環境造園学プログラム (主指導教員: 武田 史朗)

SASAKI Tau

1. 研究の背景と目的

現代の都市における墓地は、核家族化や少子化などにより無縁墓の問題が表出しており、家族墓をもとにしたシステムに変わる形態が様々に模索されている。樹木葬はその一つであるが、多くの都市型樹木葬の事例では、樹木をシンボルツリーとして用いる実質的に合葬墓の様態であることが多い。また、本質的に自然に還ることができない事例が多く、血縁による祭祀の永続性が保証されない中、大都市において尊厳のある弔いを受ける場が不足していると考えられる。

そこで本研究では、現代都市における新たな墓地のあり方の一つとして、自然葬地を都市公園における拠点施設として位置づけ、家族祭祀に変わる地域に根ざした墓地公園のあり方のモデルプランを提案するものとする。

2. 対象地

対象地は、東京都府中市と小金井市にまたがる現在府中運転免許試験場が立地する場所である。北を都立武蔵野公園、南を都立多磨霊園が隣接し、武蔵野公園の公園計画区域に含まれている。将来的には同公園内野球場へ転換が構想されている¹⁾。周辺の環境としては、北に野川が東西方向を横断し、さらにそのすぐ北側には高低差 20m ほどの斜面林を有する国分寺崖線など、密集した市街地の中に緑地が一体となって存在しているエリアである。緑地帯と多磨霊園との間の都市緑地のミッシングリンク的な立ち位置であり、エコロジカルネットワークの形成に着目した公園計画が求められる。

2. 方法

対象地の地域性を把握するため、対象地の都市構造の歴史の変遷を古地図や web 上の文献を用いて調査し考察する。その後、現在の日本において必要とされる自然葬地の様態を文献調査により調査し考察する。また、技術的な調査として後述する本提案のコンセプトの一つとなる雑木林の皆伐更新の管理形態の手順について桜ヶ丘公園雑木林ボランティアの方へのヒアリング調査 (2024 年 12 月 14 日実施) によって明らかにする。

3. 調査

①対象地の歴史的背景について

対象地の近代の都市構造は大きく分けて 3 つの時系列により成り立つことがわかった。

明治期まで: 武蔵野の雑木林

明治期は、地域一帯を武蔵野の雑木林と呼ばれる、クヌギ・コナラを主とした薪炭・堆肥用の常緑広葉樹林が広がっており、人々の畑作と樹林が共生した里山景観が広がっていた。

明治後期～昭和初期: 多磨墓地の造成

東京市の市街地化と人口増加に伴って墓地不足に陥り、郊外の多磨村に多磨墓地が計画された。墓地が市街化を先行する形で造成された。

昭和後期: 宅地化と緑地の減少

昭和期になるとこの地域にも都市化が進行し、墓地と一部の緑地を残す形で一帯が宅地化され、多磨霊園と国分寺崖線、武蔵野公園といった緑地が都市の中に残る形となった。

以上より都市構造の変遷をまとめると、武蔵野の雑木林として人々と自然に共生関係があった自然環境から、都市の拡大の受け皿として大規模な墓地や宅地化がなされてきた土地であると言える。地域に根ざした自然葬地の提案を行うにあたりこの土地の自然らしさを、人の生業の中の雑木林景観として位置づけ、単に粗放的な自然を表現するのではなく、日常的な関係のもとに成り立つものとする。

②自然葬地に求められる形態について

日本の樹木葬選択者の心理的なイメージに関する調査²⁾によると、日本の樹木葬選択者に共有されるイメージは「自然に還る」という生物学的な自然回帰が主ではなく、「自然を媒介にして不特定多数の他者とのつながりが継続される」という目的を持つ傾向がある。

ここから、家族墓の永続性が失われつつある現代において、日本特有の家族祭祀によって死後の存在が継続されていくという文化を代替するための手段として樹木葬が選択される傾向があるということが考察できる。そこで、本計画では、家族に変わる祭祀の永続性を保証する主体がその地域社会となるように、樹木葬地によって地域の風景に帰化していくイメージを持てるよう設計する。

③雑木林の皆伐更新について

武蔵野の雑木林では、15 年～20 年に一度決められたエリアを一斉に伐採し、切り株から樹林を萌芽更新するという管理形態を取っていた³⁾。

現代の管理形態を調べるため、対象地から南西に約 8km 離れた都立桜ヶ丘公園での小規模皆伐更新の事例について文献調査⁴⁾とヒアリング調査を行った。そこでは、1991 年から

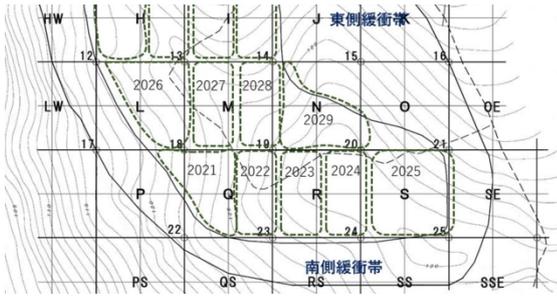


図 1：桜ヶ丘公園皆伐更新第3サイクル計画図（東京都建設局「皆伐更新による雑木林管理」より引用）

ランティアによってかつての武蔵野の雑木林の風景を復元する取り組みがなされている。公園内に有する樹林のうち約 4,000 m² を皆伐更新地区、その外周 6,000 m² の緩衝帯とし、皆伐更新地区を 15 年で一巡するよう 15 の区画をグリッド状に分け、年に 1 区画ずつ皆伐を行っており（図 1）、2021 年度から皆伐更新の第 3 回目サイクルに入っている。

区画は約 20m×20m の小規模な区画である。これは、ボランティアが人力で行うマンパワーの面と、皆伐面積が狭すぎることによる林床への日照不足を防ぐこととのバランスを取った上で決められていた。樹木の密度は 100 m² あたりクスギ・コナラを 10 本程度とし、萌芽更新がされなかった個体に対しては園内でドングリから 2 年間育てた苗を補植することで樹木密度を維持している。

4. 制作

以上の調査を踏まえて提案のコンセプトを大きく以下の 2 つとした。

①雑木林の皆伐更新と自然葬地の時間的サイクルを重ねた葬地の創出

公園の拠点施設として粉骨埋葬の樹木葬墓地を計画する。その樹木葬墓地は、「墓地の有限性」と「家族に拠らない故人の存在の永続性」を両立する計画として、吊り上げの期間と武蔵野の雑木林の皆伐更新スパンを合わせて墓地区画が更新されるものとする。これにより従来の都市型の樹木葬における契約期間によって自然回帰が絶たれるという状態に対し、故人の存在が地域の雑木林景観として地域に残り続けるものにする。

②葬地を起点として周辺都市との関係性を紡ぐ、墓地公園の立ち位置の再構築

葬地周辺には隣接する都市環境要素を引き込み、西の小学校前には故人の寄贈図書による図書館や武蔵野の生業を体験する畑を、南西のリハビリテーション病院前にはレイズドベッドを有した花畑を、南の多磨墓地前の幹線道路には墓じまいで生じる墓石の砕石による雨庭を配置する。これらを用いて葬地と街との境界をあいまいにし、利用者が故人の存在が地域の中に溶け込んでいく空間イメージを持てるような場所をデザインする。

引用文献

- 1) 東京都建設局 都立武蔵野公園整備計画
- 2) 内田 2019 現代日本における葬送と自然—「自然に還る」というイメージをめぐって
- 3) 西郊民族談話会「武蔵野の雑木林と里山環境」
- 4) 東京都建設局「皆伐更新による雑木林管理」

